

Peire Cardenal (II)

—その詩と精神について—

井 上 富 江

序

既に、Peire Cardenal(1)—アルピ十字軍期における詩—の中で、彼の詩、とりわけその *sirventès* について述べてきた。アルピ十字軍は、その残酷さと、その欺瞞との故に、即、政治的意図が、宗教と結びついた戦い⁽¹⁾における悲惨の故に深い傷跡をとどめるものであった。彼の *sirvetès* の激しさは、Cardenal の Toulouse 伯への愛着を示すと同時に、戦いというものの持つ、避けることのできない残忍さを我々に、伝えてやまない。その戦いは、Toulouse 伯の没落と、Languedoc 地方の衰退につながっていたことも、既にみた通りである。今ここで、あらためて彼の詩を論ずるにあたって、その *sirventès* を構成する基盤となり、かつ彼の後半の詩を形成する核ともなる、彼の精神的有様^{ありよう}と、そのよりどころをやはり無視するわけにはいかない。彼の *sirventès* が、「もし、Bertrand de Born の *sirventès* が、政治的風刺であるとすれば、まさに、Cardenal のそれは、精神的風刺である。彼こそ、当時のモラリストである。」⁽²⁾と、云われている限りにおいても……

I Oc への愛着と Oc の特殊性

アルピ十字軍の戦いに、直接深いかわりを持った Cardenal は、Raimon VI の没後、Raimon VII のもとで1449年までその領土にとどまり、1249年から1257年まで、Marseille に、そして1257年から、1278 (その没年) まで、Montpellier に居を定めた。その間、彼は、Uc IV de Rodez, Guiraud d'Armagnac, Gaston VII de Béarn, Roger-Bernard III de Foix 等の宮邸に滞在したことになる。これらの日付は、一体何を意味するものであろうか。これこそ、彼が、どれほど Oc の地を愛し、執着していたかを物語るものなのである。即、Raimon 伯が存命中は、その宮邸にとどまり、その生き生きとした青春時代を送ったその宮邸に、かつての華やかさはまるで消失してしまっていたにもかかわらず、伯の為に筆をつくす。その伯爵領が、一度、南仏とは縁もないフランス王の弟、Alphonse の統治下におかれるや、Marseille に、居を移してしまう。マルセイユ連合軍と Charles d'Anjou との戦い(1250—1257)は、丁度この時期にあたる。この戦いの終結に際して結ばれた条約で、マルセイユ地方も又、フランス王の統治することとなるや、Cardenal はその年、マルセイユを去った。このように、Cardenal は、まさに、Oc の人間、即、Oc の文明にはぐくまれ、それをこよなく愛する Oc 人であることが明白になるであろう。次々と没落していく、Oc 地方をみる、彼の嘆きは、次の詩の中に、うかがうことができる。

Tot enaissi con fortuna de vén
Que torba-l mar e fa-ls peissos gandar,
Es torbada en est segle la gén
Per un fort vent que dels cors fan issir
Fals messongier desleial e traire,

Tout ainsi qu'un coup de vent trouble
la mer et fait fuir les poissons, en ce
monde les gens sont troublés par un fort
vent (de paroles) que de leurs corps font
sortir les faux menteurs déloyaux et

Ab que-s cuion eissaussar e formir
Et enaissi fan veritat delir
E'n pert son dreg del tot qui ver vol dire.

traitres, avec lequel ils pensent se re-
hausser et s'avantager, et ainsi ils font
se détruire la vérité et par là perd com-
plètement son droit celui qui veut dire
vrai.

A greu sera est segl' en l'estamen
Que a estat, segon que auzem dir,
Que hom era crezutx ses sagramen,
Ab sol la fe, si la volgues plevir,
E veriatz era ses escondire.
Ar es tornatz lo segl' en tal azir
Que quecx pensa de son par a trazir:
Per qu'ieu aquest segle traire.

Difficilement ce monde sera dans la
situation où il a été, selon ce que nous
entendons dire, où un homme était cru
sans serment, seulement sur sa foi, s'il
voulait l'engager et que c'était vérité
sans contestation. Maintenant le siècle
est tellement tourné à la haine que chacun
pense à son semblable pour le trahir :
c'est pourquoi j'appelle ce siècle «traître».

(³)
(v.v. 1 ~16)

一陣の風海を波立たせ
魚 逃げさせる如く
不誠実な嘘つきと
裏切りが吐く強烈な風は
世の人々の平和を乱す
人皆、背のびし、一步なりともぬきんでんと
競い合う。
かくて、真実^{まこと}は裏切られ、
真実をいわんとする者の権利さえもはやなし。

今やこの世は昔日の姿残すこと難し。
それが 望んだ約束ならば、そして
疑いもなく真実であるとするならば、
誓約もなく、ただ名誉にかけて、
信じられたと聞くあの姿。
今や世は人皆 同胞を
裏切ることのみ考える
憎しみの世へと移った。

この世をば 裏切りというはそれが為。

一見、がんことも我々の目にうつるこの彼の Oc の地への愛着を考える時、Oc を支配していた文化を、もう一度ふり返る必要があると思われる。彼の精神的柱のある一面は、まさにこの文化に根ざすことが明らかであるのだから。さて、この南仏の地を、明らかに北仏と分っていたもの。それは、いうまでもなく、南仏諸侯の宮邸と、その中に育ち、発展してきた Troubadours 達の文化であるが、その諸侯と、Troubadours 達を支えていたものは、疑いもなく「騎士道精神」であり、その騎士道の上になりたつ封建制度であった。騎士道は、北仏にもあったではないかという反論に抗する為に、今ここで南仏独特の封建制度と、騎士道を、ふり返る必要がある。

1. 騎士たるもの、主人に対すると同様に dame と呼ぶ婦人に対しても、忠実かつ、誠実であり

従順であること。(その絆はむしろ婦人への方が強いといえよう。)

2. 南仏の地は、ローマ文化の名ごりが強く残っていたこと。(この為、ガロ・ロマン時代の遺物である自由地が存在する。) 北仏の封建制度の根幹をなす封建的な絆は、そのもとをたどれば、ゲルマンにその本流がもとめられることを考えれば、性格は自ら違ってくることは、明白である。
3. 従って、封建制度そのものも Oc の地にあつては、人が考える以上に、強制力のない性格というならば、個人の自由一が存在していた。
4. 北仏の封建制度のもとでは、土地は、主人の利益や意志によって、家臣にわけ与えられる。一方 Oc の地では各々が土地を持ち、その称号を名のりつつ、主人を持つ。いわば、主人と家臣の関係は、ある意味においては、お互いに対等であるといえる。そこに、独立心、あるいは個人主義というものが自ら育っていった。が他方、封建的な絆は、非常に弱く、脆いものであったといえる。
5. 南仏にあつては、男子の相続者と同等の相続権が、婦人にも与えられていた。このことは、封建制度と継続していく上には、大きな障害であつた。自由地の存在と共に、この土地の細分化と、それによる勢力の弱小化は、南仏諸侯にとっては、大きな痛手であつた。諸侯を滅ぼしていったものはアルビ十字軍というよりも、この内部から起こった弱体化の方が、大きいものであつたのかも知れない。しかし、このある意味では、《寛容》ともいえる性格のもとに、Troubadours 達が育っていったことも事実であつた。Cardenal が愛したのは、何よりも、この独特の精神文化を形成し、はぐくんだ Oc の地であり、北仏の文化は、既に《Raison d'Etat》という大義名分が、個人の権利よりも高く評価されつつあつたことを考えあわせると、非常に興味深いものである。⁽⁵⁾

II Christianisme

今一つ、彼の精神的柱を形成する大きなもののそれは、Christianisme である。アルビ十字軍終結後、めざましい発展をとげた Mendians の運動を考えることは、彼の Christianisme を知る為にも非常に大切なことである。「南仏社会を変えたもののそれは、アルビ十字軍の戦争でも、その力でも、宗教裁判所でもなかつた。正確には、それは、説教者達の精神的力であり、修道僧達の精神的信念である。」この言葉は、全面的には、そのままのみこめないものであり、特に、説教者云々の個所は、異義⁽⁶⁾も多いが、修道僧達のそれに関する限りは、ある程度正しいと思われる。南仏の *Manudets* (franciscains) 達が、Troubadours の Oc の文化の外見とほとんど同じように見える精神をみせていたこと、Cardenal の Christianisme と、この Manudets 達のそれを比較し、考えてみることは、その活動年代から云って、非常に重要なことだと思われる。さて、宗教的観点からみて、いくつかの重大な出来事が、この Oc の地にあつたのも、丁度、Cardenal の活動時期であつた。

後に述べる François d'Assise は、1182年に生れ、1226年に死んだ。

同じく Saint Bonaventure は、1221年から1274年の間活躍した。又 Oc の地にかくも重大な影響を与えた托鉢修道会の拡大を阻止した Lyon の宗教会議は、1274年であつた。説教者兄弟団 (Ordre des Frères Prêcheurs) の発展は、周知の通りである。又、Provence の地では、Douceline は、宗門に入ることなくして、1214年から1274年に Sainte に加えられた。又弟、Hugue de Digne は、フランシス会の懺悔聴問僧である。より、フランシスコ修道士達と Peire Cardenal のかわりあいを、あきらかにする為に、彼の詩をいくつか引用してみたい。およそ、1222年頃、Cardenal は、Mon Chantar Vueil Retraire Al Cuminal の中で次のようにうたっている。⁽⁷⁾

Si morgue nier vol Dieus que sian sal
Par trop manjar ni per femnas tenir,
Ni monge blanc per bolas a mentir,
Ni per erguelh temple ni espital,
Ni canorgue per prestar a renieu,
Ben tenc per fols san Peire e sant Andrieu
Que sufriron per Dieu tan gran turmen
S'aquist venon aissi a salvamen.

Si capellan per trop beure anoal
Ni legistas per tort a mantenir
Ni albergier per lor oste trair
Ni logadier per falsar lor jornal,
Ni regidor ni baile ni corrieu
Rauban la gen si salvan, non cre ièu
Que menudet non reinhon follamen
E sil qu'estan confes e peneden
(8)
(v.v. 25~40)

神がもし黒衣修道僧達を
美食し、女を囲ってさえた彼らを
お救いになるならば
はた又白衣修道僧達を
他人の土地侵し、虚栄の為
寺院、医院建てた彼らを
そして又、金利とりつつ金を貸す
教会参事員達を救うなら、
かくもきびしい苦行つみ、神の為苦しみぬいて
救われたサン・ピエールも、サン・タンドレも
私にゃきちがいとしか思えない。

もし神が《ミサ》に酒飲む司祭達、
不正を支持する法学者、
客を裏切る宿の主人、
のらくら遊ぶ日雇人夫、
略奪をほしいままにする管理人や監督官やその従者を
お救になるものならば
フランススコ修道僧が、懺悔や贖罪する者と同じ
放埒な暮ししていると信じよう

少くとも、Cardenal にとって、フランススコ修道僧達は、Cluny 派や Citeaux 派の修道士達とは、違った集団として、受けとめられていたことは明らかである。

Si Dieu veut que les moines noirs soient
sauvés pour trop manger et entretenir des
femmes, les moines blancs pour bornes des
terres à déplacer, le Temple et l'Hôpital
pour leur orgueil, les chanoines pour
prêter à usure, je tiens bien pour fous
saint Pierre et saint André qui souffrirent
pour Dieu un si rude tourment, puisque
ceux-là arrivent ainsi au salut.

Si les prêtres pour trop boire «an-
niversaire», les légistes pour injustice à
soutenir, les aubergistes pour trahir leur
hôte et les journaliers pour mal employer
leur journée, si enfin les régisseurs, in-
tendants et courriers en pillant les gens
font leur salut, moi je ne crois pas que
les frères mineurs ne vivent pas follement
(dans le dérèglement) ainsi que ceux
qui sont confès et pénitents.

1229年につくった Ab Votz d' Angel, Leng' Esperta, Non Piézaの中で Jacobins (ドミニコ会修道士達)が、どのように扱われているかを対比してみれば、フランシスコ修道僧への扱いの違いは、更に明瞭になってくる。

Religios fon, li premieir', enpreza
Per gent que treu ni bruida non volgues,
Mas jacopin apres manjar n'an queza,
Ans desputan del vin, cals mieillers es,
Et an de plaitz cort establia
Et es Vaudes qui-ls ne desvíá ;
E los secretz d'ome volon saber
Per tal que miels si puescan far temer.
(v.v. 25~32)⁽¹¹⁾

La première communauté religieuse fut instituée par des gens qui n'auraient pas voulu tracas ni bruit, mais les jacobins après le repas ne gardent pas le silence, au contraire ils disputent sur le vin, quel est le meilleur, et ils ont établi une cour pour juger les procès et il est Vaudois celui qui les en détourne ; et ils veulent savoir les secrets de tout homme de telle manière qu'ils puissent mieux se faire craindre.

最初に宗教教団創設し給う人々は

騒ぎも物音も好まれぬに

しかるに Jacobins の ^{やから}輩 共食事の後に黙らぬばかりかその反対

ぶどう酒はどの銘柄と論議はじめるていたらく

訴訟裁くに裁判所開き

Vaudois 達は、それを止めたが、

Jacobins 共は他人の秘密知りたがり

人お互いを恐れさせる。

1222年といえばフランシスコ修道会が Toulouse に設立された年であり、Cardenal はその年 Toulouse で暮していた。

又彼が Marseille にいた1249年から1257年は、前述の Hugues de Digne によって設立された Sachets (苦業会)が、その地に発展をとげた時期でもあった。1251年5月21日、既に存在していた12の Sachets の小修道院長の修道会総会が、この地で開かれている。Hugues de Digne が亡くなったのは、1255年、あるいは、1256年だといわれているが、この地で没したことは確かである。又、Cardenal が Montpellier に移った時、Saint Bonaventure は、その2年後、1257年にその地を訪れ、Narbonne での1260年修道会総会におもむいている。こうしてみると、彼の生涯の大きな部分が、この Oc の地に設立されたフランシスコ修道会の修道士——彼らを Cardenal が Manudets と呼んだのを既に見てきたのだが——と共にかかわりあいを持ち、その思想によって深い影響をうけたであろうことが想像される。

III Franciscains と Oc の文化

このフランシスコ修道会と Oc の邂逅が、Trobadors 独特のエロティックな表現を、修正するという形をとらなかった点も興味深いことである。

Cardenal がしばしば引用し、尊敬する使徒として語る Emergaud について、F. Durrieux 神父は、その言葉を次のように引用している。「Troubadours の愛についていえば、ただ、それを純粋化し、天上の愛へと昇華せしめることにおいてのみ興味をいだく」

即、Zelanti (宗教的熱中)する性格も、Joy (宮邸恋愛における⁽¹²⁾愛の喜び)を歌う人々のそれも、同じ性格のものだとみなす。Jeanroy の言葉を借用するならば、それは、「同じ抒情的高揚で

ある」ということであろうか。フランシスコ会の修道士達は、この Oc の地にひろがり、日常生活の中にしっかりと根をおろしたこの Courtoisie や、Joy d'Amor に結びつく精神風土が、カタール派や Vaudois という異教や、異端を受け入れる素地であることを、読みとっていたのだというべきかも知れない。Durrieux 教父は、次のように言葉を続ける。「我々の béguins だって、キリスト教的生活を願う俗人であったと云えよう。こういう風潮は、この Oc の地では古くからあったのです。そして伝統的な杓子定規な解釈の教義では、満たされない、長い間放置されていたこの願望がカタール派や Vaudois を成功させることになったのです。我々 béguins の少なくとも1つ以上は、この地方の異端の改宗したものであるはずだったのです。」彼のこの言葉は、Cardenal の場合、そっくりあてはまる。彼の作品の半分は、この俗人でありながらキリスト教的生活を熱望する一種の Catéchèse (宗教教育) ともいえる種類のもの以外の何物でもないということである。伝統的な解釈に安住し、身を潔く保とうとしない clerics への批判は、既に述べた通りである。彼の次のような詩句の中に、独特の純粋なる神への願望がうかがえる。

Ni de Dieu non tene un pogés Et de Dieu Je ne tiens pas même une pougeoise,
 Mas un'arma que li rendrai.⁽¹⁴⁾ sauf une âme que je lui rendrai
 (v.v. 11~12)⁽¹⁵⁾

神々より 一文たりとも得たりしない
 やがて神に返すべきこの魂を除いては

もちろんこの「一文たりとも云々…」のくだりは、彼が、しばしば批難する cleric 達への皮肉であり、自らの信仰が彼らと違って、はるかに純粋で深いという宣言でもある。次の“Vera Vergena, Maria”の中では、Durrieux の言葉を更に裏づけるであろう。

Ver' amors, vera mercés :

Per ta vera merce sia
 Qu'eret en me tos herés!
De butz, si-t plai, dcna, traita
Qu'ab to fiuh me sia feita!

Vera vergena, Maria,
 Vera vida, vera fés,
 Vera vertatz, vera via,
 Vera vertutz, vera rés,

Vera maire, ver' amía, (v.v. 1~10)

真の処女, マリアさま, 真の生命, 真の誓い

真の真理, 真の願い

真の徳, 真の現世

真の母, 真の恋人

真の愛, 真の憐憫

あなたの真なる憐みで

あなたの後継者が, 私の中に相続されますように!

どうぞ, あなた, 安らかになさしめ給え

あなたの御子と共に, 私の為それがなされますように!

このマリアへの熱烈な呼びかけの調子には、明らかに Troubadours 達が歌う、婦人への愛の調子がこめられていることが容易に見出せる。この Troubadours の地に、その文化にはぐくまれて生活してきた Cardenal の信仰は、裏を返せば、Durrieux の指摘する Joy を歌う詩人達の魂の

高揚であるということもできるであろう。

IV. Sachets と Cardenal

今ここに、Cardenal の一般的道徳を扱った Satire へと目を向けてみると、1251年、マルセイユに設立された Sachets (苦行会) の修道士達の態度との類似に驚かされる。

マルセイユ史の記述によると、「Sachets の修道士達は、その説教の中で、金持や、権力者達と妥協した既設の教会や、修道会を、おおっぴらに攻撃した」

Cardenal は、既にみたように、1249年から1257年の間、マルセイユで暮っていたこと、この時期に Sachets は異常とも思える程発展したこと、そして、Sainte Douceline のベギーヌ会修道院の設立もこの時期であったこと、フランシスコ会修道士達がこのマルセイユ市民団の中に緊密なつながりをもつようになり、Charles d'Anjou に対するマルセイユ連合軍の戦い(結局この戦いは、Charles に連合軍の財産は期することになった1257年の条約で終決する)の中で、所有権回復の訴訟をおこしたものがこの時期であった。

次の詩の中に Sachets 修道士達が、説教の中でなしたであろう、憤激と、その戦いの間になされた掠奪への反応を、そのままうかがうことができよう。

Pretz e ben fag laissez chazer:
Per que lialtatz se rescon
E merces non auza parer
En luoc, quar quascus la rebon
E cobeitatz pela e ton
E rauba et acuza e pen
Que negus doms non o enten
Mas quon breumen aya l'argen
De sos homes e-ls draps e-ls vis e-ls btatz;
Pueis no li-n cal si-ls cassa paupretatz.

(v. v. 11~20)⁽¹⁸⁾

彼らときたら徳も情けも地に落ちたまま
誠実もなく、憐れみなど
どこを探せばあるのだろう
誰もかれも 自れを偽るばかり
貪欲は、金をまきあげ、丸裸にし
掠奪した上、人に罪させ絞首刑にし
殿さまとて すっぱりと、他人の金、布、酒と麦
まきあげる時しか法使わず

Ils laissent déchoir mérite et bienfait:
aussi la loyauté se cache et la pitié n'ose
paraitre en aucun lieu, car chacun la
dissimule. Et la convoitise écorche, tond,
pille, accuse et pend. Car nul seigneur
n'a d'application sauf pour avoir
promptement l'argent de ses hommes,
leurs étoffes, leurs vins et leurs blés;
puis il ne lui en chaut si la pauvreté
les chasse.

pauvreté についての見解も、フランシスコ会修道士達と、Cardenalの間には、著しい類似が認められる。フランシスコ会修道士達の *cortezia*, それは喜び、即、喜ばしき *pauvreté* であろう。この *pauvreté* ということについて、F. Durrieux は、次のように語っている。「Hugues は、たとえ法王といえども、*pauvreté* という荘厳なる誓いをたてたことによって、フランシスコ修道会の修道士達を、弾圧することはできないということを躊躇なく支持するであろう。この誓いが、神の御前で完全である限りにおいては……。この己れの信仰に対する抑えがたい熱狂的確信が、教会のわずかの揺ぎにも、堰を切っておとされるであろう。」この確信は、神と人間との間に仲介しようとする何物をも拒否する。たとえ、それが法王⁽¹⁹⁾であろうと、人間と神との間に、立ちふ

さがり、己れの善とする物に反して行われようとする権威は、当然のことながら、一切拒否するものであった。そのことは、結果として、狭い教義よりも、人間個々人の持つ靈感を信じることになった。そして、これこそ、既にみた、Troubadours の愛の魂にうけつがれた Oc の文明であり、その中にみられる一般の特徴であった。即、hiérarchie (僧職にあるものの階級制度) は、ここでは、個人の独立と、自由への嗜好、ある種の平等主義に、その座をあげ渡すことになったのであった。フランススコ修道会の修道士達が、この Oc の地の文明に、染まり、その社会的風土をそのままに具現していることに気づく時、あらためて、Cardenal との類似が浮きぼりにされてくるのである。そして、そのことは、並ぶもののない使徒として名高い François d' Assise が強い反慣習主義 (anticonformisme) をとっていたことを想起させるものでもある。

V. anticonformisme と Cardenal

この anticonformisme は、Cardenal の詩の泉ともいえるもので、この後、彼の詩の中の随所にみられるものである。それが、司祭達を風刺させるものであったし、又その司祭達の高位が少しも彼の矛先を鈍らせなかったのも、その為であるといえよう。

E d'aisso vos pot hom partir
C'aisi com plus aut son prelat
An menz de fe e defeutat
E mais d'engan e de mentir;
E menz en pot hom de ben dir,
Car mais i a de falsetat
E menz de ben e de vertat

Et de ceci on peut vous proposer la
gageure: que plus haut placés sont les
prélats, moins ils ont de foi et de fidélité
et plus ils ont de perfidie et de mensonge;
et moins on en peut dire de bien, car
plus il y a en eux de fausseté et moins
de vérité et plus de...

E mais d (ir)
(21)
賭けてもいい (v.v. 33~40)

一番高位は司祭さ
奴ら誓いや忠実からはるか遠く
裏切り嘘つきご繁盛さ
徳が少なきゃ少ない程
ますます奴らにゃ虚偽があるわナ
真まことが少なゃ少ない程ますます...

人間の価値は、その地位によって決まるのではない。彼にとっては、たとえ baron であろうとそれは同じことであった。

Tals a vestit
Drap de esamit
E pot be gran arer mandar,
Que ges no-l do
Nom de baro,
Quan li vei malvestat menar.

Tel a revêtu drap de satin et peut bien
gérer une grande fortune, sans que je lui
donne aucunement le nom de baron, quand
je lui vois mener méchante conduite.

E tals es nus,
Que non a plus
C'aquel c'om porta bateiar:
Sol car es pros

Et tel autre est nu, qui n'a pas plus
que celui qu'on porte baptiser: seulement
parce qu'il est vertueux et que raison lui
plait, on le doit appeler baron.

E-il plas razos,
Lo deu hom baron apellar. (v.v.97~108)

サテンの服着てあり余る⁽²²⁾
財産持って
そんな御大尽であっても
悪しき行い
する時にゃ
真の baron とは呼べぬわい

裸のまま
洗礼受けたそのままの
何も身にまとうものない御人でも
徳高く、正しくありさえすれば
彼を baron と呼ぶべきさ

この詩に流れている人間を価値づける真の在り方は、彼を moraliste として評価する由縁であらう。神は、「悪徳の勢力者の子孫を、およろこびなさらないが故に、それだけ細民達の子孫をおつくり給う」⁽²³⁾ (Ni tant non ama son frut Com fai del pobol menut)

Cardenal⁽²³⁾も、フランシスコ修道会の修道士達も、常にこのしいたげられた人々の側にいる。そしてこの社会的な意味での anticonformisme は、知的な意味でも、やはり認められるものである。Cardenal がなぜフランシスコ会修道士の悪口を云わないのに、ドミニコ会修道士達をかくも悪しざまに云うかを説明するのは、まさにこの点においてなのである。即、この Oc の地に於いて、宗教裁判所で、その初期の段階で、ドミニコ会修道士達のはたした役割は、Cardenal の反感を買うに充分であった。彼の詩、XXVIII (Ab votz d'angel, lenga aspèrta, non bleza) と、LXXVII (Tot enaissi com fortuna de vent) に、彼の憤慨ぶりをみることができる。しかしこの反感には、ただ感情的なものばかりではなく、より深い動機もあつたのである。それは、知的権威をふりかざし、押しつけようとするもの全てに対する、即 Troubadours 達の理とする《思いあがりに対する嫌悪》というべきものなのであった。知的なこの思いあがり、Cardenal の最も嫌悪するところであったのだ。神を認識するもの、それは、学問でもなければ、学問を支える学者達でもないことは明白である。それは、contemplation (冥想) と méditation (考究すること) でなければならぬ。Cardenal の言葉を借りて言うならば、*connoissença* (認識すること)、*ententement* (理解力)、*bon ensenhament* (よい教育) である。彼が尊敬する Saint Bonaventure の考えるところもやはりそれであった。「哲学する者は、自分が知っているものよりも、信じているものにより忠実である」⁽²⁴⁾ 知っているものだけに忠実であり、ドミニコ会修道士達が宗教裁判における異端諮問の際に示した、信じるものに忠実であろうとした人々を容赦なく異端と断定する態度に、Cardenal が、怒りを覚えるのは、当然のことであった。

...pellaç herege que [Pels clereses a]pellatz [Par les clerics est] appelé hérétique
ne jura herege qui ne jura quiconque ne jure pas selon leur
...engan e de faus- [Segon la lor razon d'] système de tromperie et de fausseté;
sura engan e de faussura;
(v.v.1~2)

...ra quella faussa [Ieu ja non auzi] rai [Mais je n'écoute] rai [certes pas]
ciergia quella faussa clergia ces faux clerics [qui n'honorent ni] Dieu

…deu ne lauergen maria	[Que non onren ne] Deu ne la vergen María	ni la Vierge Marie [et en paroles] et en actions sont pires chaque jour; [et celui] qui les croit et qui en eux se fie [les trouve] vides de pitié et sans acte de courtoisie.
… <i>et</i> enfaç son pe- gour çascun dia	[Et en ditz]et en fatz son pejour cascan día;	
… <i>el que</i> les crey ne <i>que</i> enlour se ffia	[Et aqu]el que les crey ne que en lor se fia	
…ouid de merce e sença cortessia	[Troba-ls]voidz de merce e sensa cortesia	
…il son plain de fol- lour e dorguel e duffana	Il son plen de folor e d'orguelh e d'ufana	Ils sont pleins de folie et d'orgueil et d'arrogance ces maitres pasteurs de l'église romaine. Ils sont faux et fripons envers la gent chrétienne;
…st mestre pastour de la glisse romana	Aquest mestre pastor de la gleisa romana.	[quiconque] vécut parmi eux a volonté perfide [et] ils montrent mauvais travail sept jours de la semaine.
…il sont fause trua- ver la gent cres- tiana	Il son faus e truand vers la gent cretiana.	
…ignet entre lour auollonta traffana	[Qui re] ignet entre lor a volontat trafana	
…m traou mal labour sept jour de la se- mana	[E] mostran mal labor set jorns de la se- mana. (v.v.11~20)	

(25)
あの修道士達によって
異端と呼ばれた誰だって
虚偽と欺瞞に満ちた制度に沿って誓いはするまいものを

この私、あの偽修道士達のいうこと聞くものか
神もマリアも尊敬しない奴らだから
行いも言葉も 毎日 悪いことばかり
彼らを信じ 身をゆだねた人は皆知るさ
憐みもなく courtoisie の行いも知らぬ奴らを

あやつらは狂気、高慢、尊大のかたまり
あのローマ教会の司牧会先生共は…
奴らキリスト教徒に対する不当なペテン師さ
奴らの中にいたら誰だって裏切りたくもなるさ
一週間の七日間、悪い手本みせてばかり…

Cardenal は、彼らが行いの伴なわぬ詭弁家であり、Oc の文化的基盤である、courtoisie 的行
為について何らの知識もない野蛮人だと批難する。かくも野蛮な人々が、教義という思いあがり
と、権威をふりかざし、人々を次々と異端ときめつけ、何も知らない人々を否認なく、その権威
の中にひきこんでいくのを見、自分の心を土足で踏みにじられたような苦しさや屈辱を感じた
ことが想像される。彼が、愛という人間の価値を全ての権威に、優先させることは、明らかな
ことである。た

とえ、それが教会支配者であろうと、彼の anticonformisme が、ゆるぐことはないのであった。

VI Charité と pauvreté

《Jesus Cristz, Nostre Salvaire》の330行にもわたる、膨大な“Sermo”の中で、彼は Charité (愛) と, Juste (正義) と Loyauté (誠実) への義務を、修道士達への呼びかけの形をとりつつ、訴える。

Ja neguns homs que Dieu créza
Non amassara riquéza,
Que-l pietatz e-l grinéza
Li fai despendre l'argen. (v.v.49~52)

Jamais nul homme qui croie en Dieu
n'amassera de richesse, car la compassion
et le saisisement lui font dépenser son
argent.

Merces es causa tan larga
Que de ben faire no-s targa:
Aver e pecatz descarga
A son don cominalmen. (v.v.57~60)

Pitié est chose si généreuse qu'elle ne
met aucun retard à faire le bien: de son
avoir et de ses péchés elle allège tout
ensemble son possesseur.

—Aus tu, que gleiza govérnas
E cobeitas e chaupernas
L'autrui dreg? del tot t'enfèrnas
Si caritatz no-t defen. (v.v.113~116)

Entends-tu, toi qui gouvernes l'église
et qui convoites et foules aux pieds le
droit d'autrui? tu te damnes complètement
si la charité ne te défend pas.

⁽²⁶⁾
神を信じる人は誰でも
財をなそうと思ふなけれ
憐みも喜びの感動も
お金を出さずばできないものを

憐みは、かくも高潔なものだから
相あらそうて善をなす
その持主は、罪も財産もいずれをも
取り去られて 身も軽く

君聞くや、
教会を司どる君よ
他人の権利ほしがつて
足もとにそれを踏みじめる君
もし神の愛が君を護ることなくば
君は、あっさり地獄行き

この修道士達への軽妙な呼びかけは、あまりに率直で、あまりにも露骨すぎるので、人は彼を、カタールであると断定する。しかし「創造は、悪の業であるから、物質も、肉体も、本来的に悪である。」とする、キリスト教とは、全く別種の二元論をとるカタールは、彼の詩を見る限りにおいては、全く別のものである。彼は、ただ初期の Vaudois 達が意図した、清貧という、福音的理想を甦えらせるべく努力したにすぎない。俗世に余りにもぬくぬくと安住し、高位にある聖職者や修道僧が、余りも富み、余りに権力を持ちすぎ、安逸におごっていた為に、内部から反発してでき

た、フランシスコ修道会と、その期するところは、同一のものであったことがわかる。

けだし「愛の神によって武装した彼の精神」をもってすれば、「信仰の曇りなき目によって見る神」のみ見ることになるのである。(Ab lo Diu d'amor Cul esperitz armatz vé Ab los Clars hueilh de la fé)⁽²⁷⁾

この世が、たとえ悲惨で、醜くかろうが、彼は、カタールのように、死のみを願いはしない。常にこの世に於ける Charité の勝利を、そして神の愛を具現できることを信じている。カタールのその教義の峻厳さに、共感を感じるであろう。しかし、それにおいて彼をカタールと断定することは、人々が、初期の段階に於いて、カタールと、Vaudois が、全く同種のものだとした誤解をくり返すことになるであろう。

さて、今ここで、残存する Cardenal の詩を詳細に検討してみると、その11編は、伝統的な愛の詩、又は婦人に対してうたったもの、残る85編のうち16編は、直接 *pauvreté* ということについてうたったもの、12編が間接的に——即、金持や食欲という風刺の形をとって——*pauvreté* を扱ったものになる。(ただし、詩の中に散在し、ただ単に *la cobezosa* (*la cupidité égoïste*), *la cobeitat* (*l'avidité*), *l'avareza* (*l'avarice*) という種類の *allusion* のみにとどまっているものは、その数に入れていない。) こうしてみると、彼の詩の⁽²⁸⁾ 半は、*pauvreté* ということが、その主題として扱われていることになる。この *pauvreté* が Cardenal の詩に占める比重を考える時、改めて、アルピ十字軍で荒廃した Oc の地に、どのようにして、Saint Dominique が布教したかを想い出してみるのも無駄ではあるまい。彼はひたすら *pauvreté* のみを説いてまわったという。もっと後にフランシスカン達が、異常とも思える発展をとげたのは、Oc の諸侯、領主達が没落した時期であることを考え合わせると興味深い。*largueza* (*largesse*) と呼ばれるよき時代のおごりは望むべくもない。富の顕示、分配、そして浪費すら、名譽と栄光の資格、名声の源としてあった時代に、或る領主は、12組の雄牛に畑を耕やさせて、それに3万エキュの金貨をまかせた。又別の領主は、名馬30頭に火を放ってかかり火にしたという。3番目の領主は、300人の騎士を連れてきて、ローソクの熱で晚餐の支度をするようにした。こういう話がまことしやかは話される程そのおごりは大変なものであった。このよき時代の⁽²⁹⁾ 《*largueza*》を、忘れることのみ意をそそがねばならない時代になっていたのである。そこにフランシスカンの *pauvreté* の発展する素地があったのであった。

「僧服をまとわない多数の婦人や男達が、贖罪をしにフランススコ修道僧のもとを訪れ、彼らの信仰にすがった。そして祭日には、たくさんの公証人、裁判官、医者、そして文学者達が、Hughes 教父の部屋に集ったものだ。」と、1248年から1249年の Provence の様子を Salimbene は語っている。Cardenal 自身もその⁽³⁰⁾ 文学者の一人であった可能性は、きわめて高い。

しかし、この“*pauvre*”という語の意味を正確に把握しなくてはならないであろう。即、今日我々がいう“*pauvre*”ではなく、まさしく、この時代にあっては、一階層、一階級の名前であったということを考えなければならない。Douceline 教父は、この *pauvres* と呼ばれる人々に、施しをしたりはしない。ただ、神の愛をもって、彼らを自分の院に住まわせてやる習慣であったという。Louis d'Anjou のところも同様に、何人かの *pauvre* 達が暮すのを許されていたという。

Qu'ieu vei que-l ricx es savis apellatz
E-l paupres es fols e caitius clarmatz.
Al ric parec, del segle traspassan,
Et al Lazer, cal mes Dieus en soan.

⁽³¹⁾
(v.v.4~7)

Car je vois que le riche est appelé sage
et que le pauvre est proclamé fou et
misérable. Mais il parut, d'après le riche
quittant le monde, et d'après le Lazare,
qui des deux Dieu tint en mépris.

Ges paupres hom non deu esser cassatz,

Un homme pauvre ne doit point être

C'atressi a sen et entendemen
Con a lo ricx e razon eissamen,
E trobar n'es de ben aconsellatz,
E si el es enconseil apellatz,
El lo dara lial e ses enguan
E qui-l creira no i poira aver dan.

(v. v. 15~21)⁽³²⁾

金持は賢いと云われ

pauvre は ばかだ憐れだと批難される
だがしかし、それはこの世去らんとする金持
神を軽蔑した Lazare によってできたもの

pauvre と呼ばれる人が追放されるべきじゃない
金持同様全てを感じとり、理解する力もあれば正しくもある
充分な思慮もある
もし彼が Conseil に呼ばれたら裏切ることなく忠実に
それを与えることだろう

彼を信じた誰にでも無念の気持など味わせはしまい

全ての権利も力も奪われ、社会生活からはねのけにされ、財産を所有することも、それを享楽することもできない pauvre という階層に対する、Cardenal の人権宣言ともいうべきこの詩で、彼は pauvre 達を擁護する。それは、Cardenal が、もっと前の世に、この Oc の地に、pauvre という階級が存在していなかったことをよく知っているからでもあった。

彼らは、社会の屑として考えられてはいなかった。Oc の一見ばかばかしいような領主達の名誉と栄光をかけたあの《largueza》のおかげでゆったりと領主達のもとで暮らすことができたのである。時代が変わった為に新しい領主や人々に、まるで虫けらのように扱われ追放されようとするに、心から憤りを感じていたに違いない。新しくこの地に入って来た人々の習慣や、意識は、あまりにも、Oc のそれと、かけ離れている為であったのだ。Cardenal のその変容に対する哀惜の思いを次の詩が伝える。

Aras es vengut de Fransa
Que hom non somóna
Mas sels que an aondansa
De vin e d'anóna,
E c'om non aia coindansa
Ab paubra persóna,
Et aia mais de bobansa
Aquel que meins dóna,
E qu'om fassa major
D'un gran trafegador
E qu'om elea-l trachor

E-l just dezapóna. (v. v. 25~36)

かくの如き風習が今フランスからやってきた
つまりそれ、ぶどう酒、小麦たんと持つ者のみ招き

chassé car il a sens et entendement tout
comme le riche et raison pareillement—
et il s'en trouve de bien avisés — et s'il
est appelé au conseil, il le donnera loyal
et sans tromperie et quiconque le croira
ne pourra y éprouver dommage.

A présent est venu de France cet usage:
que l'on ne convie que ceux qui ont
abondance de vin et de blé, et qu'on n'ait
pas de relations avec une personne pauvre,
ef qu'il ait le plus d'ostentation celui qui
donne le moins, et qu'on fasse un chef
d'un grand trafiquant, et qu'on élise le
traître et qu'on destitue le juste.

pauvre 達とは袖すりあわせることもなく
みせびらかしこそすれ やるものは少なめ
大いんちきの親玉つくり
裏切り者選んで、正義を放免することさ

この詩に当時の北仏と南仏の習慣の違いはうかがえるであろう、とりわけ“Et *avaretatz* s'ature-
Encontre *largueza*” という第二節の“*avaretatz*”と“*largueza*”の対比に、Cardenalの胸中を
おしはかることができよう。

Assas es viltatz
De condutz e de blatz,
Mas d'amor es faillensa
E de faitz onratz;
Et es petit amatz
Lo paures e-l cochatz,
E troba bevolensa
Lo rixx e-l sobratz.
E-l paures non a sen
Encontra lo manen,
E sap mais us trahire
Que duy ignoscen,
E-ls ditz de Moysen
Non vol hom tant escrire

Can d'un mescrezen
Que sas paraulas ven. (v.v.65~80)

ありあまる程充分な⁽³⁴⁾
糧も小麦もあるけれど
愛も誇らかな行為もなく
pauvre や困窮者には目もくれず
金持、長者、愛想よし、
pauvre にゃ、今や金持に比する心もなく
裏切り者が2人の正直者より物知りで
言葉たくみに売りつける異教徒の話の如く
モーゼの話書くも好まず

“*Largueza*”の死は、まさに愛の滅亡であることをはっきり述べている。死ぬ直前10年間の間に書
かれたであろうとされる。次の詩にも、同じ感慨が述べられている。

Assas es pel mont granz plentatz
De rix manjars, de tot condut;
Claras aigvas s'an corregut,
De blatz e de vins s'a viutatz;
Mas d'amor a gran faillimen
E de fatz d'onor, veramen,
Ez homps paures ven en azir
E decassatz, si ver vol dir. (v.v.25~62)

(35)

Il y a suffisante profusion de vivres
et de blés mais il y a pénurie d'amour et
d'actes honorables; et il est peu aimé le
pauvre et l'être en détresse tandis que
trouve bienveillance le riche et le comble.
Et le pauvre n'a point d'esprit en com-
paraison du riche, et un traître en sait
plus que deux innocents, et on ne veut
pas écrire les discours de Moïse d'aussi
bon gré que ceux d'un mécréant qui vend
ses paroles.

Il y a par le monde grande abondance
de beaux repas, de toutes provisions; des
eaux limpides ont ruiselé, de blés et de
vins il y a foison. Mais il y a grand
défaut d'amour et d'actions honorables,
oui vraiment, et l'homme pauvre vient en
butte à la haine et persécuté, s'il veut
dire la vérité.

この世には、かくも豊かな
 おいしい食事、あらゆる産物もある
 澄んだ水が流れ
 麦も酒も豊かに…
 だがしかし 大いなる欠陥があるぞ
 愛も誇らかなる行為もない
 本当に!
 pauvre 達は、憎しみのまと
 たとえ真実言うたとて
 迫害されているのだから…

世の中が平和になり、人々は豊かに暮せる世の中にあっても、彼の目は、常に弱い迫害された、pauvre の方にむけられている。

そして、Hughes 教父や Douceline の例をみる限りにおいても、彼らの精神は、Cardenal の意識、精神と同じ有様ありようを示す。Cardenal の「神を信じる者の理想」は、彼らの中にそのままに生かされている。即、フランシスカン達の pauvreté は、キリスト教的、神の愛(38) (charité) であり、それは、Cardenal の精神の中の、Troubadours 的 “Largueza” であり、愛であるということが明らかにされるであろう。

註

- (1) 別府大学紀要第16号の拙論 Peire Cardenal (1)—アルビ十字軍期における詩—参照
- (2) Pierre BEC : *Nouvelle Anthologie de la Lyrique Occitane du Moyen Age* p.274 (Aubanel) 1972年
- (3) René LAVAUD : *Poésies Complètes du Troubadour Peire Cardenal*. p.511.(Privat) 1957年
- (4) C. CAMPROUX : *Le Joy d'Amor des Troubadours*. Ch. II.p.32 (Causse & Castelnaud) Montpellier 1965年
- (5) 北伝では、カペー王朝期既に「王の子は、chevalier である。」という矛盾したことも王という名前で既になされていた
- (6) Cahiers de Fanjeaux, 8 : *Les Mendiants en pays d'oc au XIIe siècle*, (Toulouse. Privat)
- (7) この年号については、R. Lavaud は、1229年以降、1229年から1249年の間を、とっているが、Franciscains との関連からいって、C. Camproux は、1222年という説をとっている。
- (8) R. Lavaud : op. cit, p.390
- (9) bénédictins de Cluny をさす
- (10) bénédictins de Citeaux をさす
- (11) Ibid : p.162
- (12) Cahiers de Fanjeaux : op. cit. p.92
- (13) Ibid : p.p.403~413
- (14) une pougeoise は Le Puy 地方の1ドニエにあたる
- (15) R. Lavaud : op. cit, p.242
- (16) Ibid : p.232
- (17) *Histoire de Marseille*. (Toulouse. Privat) 1973年. p.101
- (18) R. Lavaud : op. cit, p.478
- (19) Cahiers de Fanjeaux : op. cit, p.20
- (20) R. Lavaud : op. cit, p.96

- (21) Ibid : p.394
- (22) Ibid : p.428
- (23) Ibid : p.458
- (24) E. Gilson : *La Philosophie au moyen age*. (Payot) Paris. 1947. p.440
- (25) R. Lavaud : op. cit, p.p.184~186
- (26) Ibid : p.p.334~341
- (27) Ibid : p.278
- (28) H. Davenson : *Les Troubadours* (éd. du Sud) 1961年 “Les Troubadours et les Cathars”
参照のこと
- (29) Ibid : 彼は「その信偽は、ともかくとして、そのようなふるまいが、南仏諸侯達の心意気とされたことは確かである」という。
- (30) Cité par Gout : *La Vie de Sainte Douceline* (Bloud et Gay) Paris. 1927年. Introduction à la Vie de Sainte Douceline. p.22
- (31) 本来は、癲病患者であるが、「悪い金持」の比喻として使われる
- (32) R. Lavaud : op. cit, p.p.524~527
- (33) Ibid : p.80
- (34) Ibid : p.374
- (35) Ibid : p.506
- (36) Ibid : LV. 中の13節参照のこと. p.334